

屋前には英一は獵師の休憩小屋に舞い戻った。戻った先には奏美と小春それに由海が待っていて戸口を叩いて英一が誰何の声に応じたところ奏美が一も二もなくこれを開いて彼に抱き着いた。彼女の温かさを英一はひどく喜ばしいと思った。

「心配したんだから……！」

「悪い。色々あったんだ」

英一は一通りのことを話した。由海は游次郎の話が出ると一瞬身構える様にびくついたが、英一は努めて平静に自分や彼の偽者が襲い掛かって来たことを伝えた。

「と云うことは、私が見たのも……」

「少なくとも正雁先輩が見た時の楚さんは既に偽者と先に会っていたってことだろう」

悪いことをしてしまったと由海は俯き、奏美がこれを慰めた。……小春は浮かない顔のまま、話が途切れたのを見て席を立ち小屋の外に出た。英一はそれが気になって彼女の後を追った。小春は小屋の小さなテラスで停まっていた。英一は脅かさない様に、しかし存在を示せる程度の緩やかさで歩み寄って尋ねる。

「何か心配事でもあるのか？」

「その……私、やっぱり足手まといですよね……」

小春はここまでその喘息と云い体力のなさと言、周り、特に英一の努力がなければとつくに犬死していたと強く思い詰めつつあった。虫一匹にさえ怯える情けない自分がこのまま英一たちに付いて行くのは、危機に陥った時諸共殺してしまうだろうと。英一はこうした彼女の吐露を自分の痛みの様に聞いていた。彼は彼で周りの女の子、或いは友達である人々を満足に守れているとはあまり確信が持てなかった。化け物と出くわしては逃げるばかりしか手がない無力な自分を悔しいと思う向きが決して小さくなかったのである。

「名賀搗さんはよく頑張っている筈だよ。みんな辛いんだ、その中で付いて来れているだけでも立派なものだよ」

「そんなこと、ありません……」

「希望を失っちゃ駄目だ。正雁先輩が言っていたよ、『どうしようもないことを確かめない限り諦めるな』って」

「私には、本当に、どうしようもなくなくて、ぐすつ……。あの大きな化け物が出た時も、私、足が竦んで、楚先輩よりも自分のことを優先して……」

「あの時は誰だって普通はそうする。俺みたいな考えなしをやって共倒れになるリスクを思えば君は正しいよ」

「でもそれは、先輩を見捨てようとしたことに他ならないでしょう？」

小春のその一言は蚊の鳴く様に小さかった。己の憤りと無力の葛藤がこの大人しい少女に大声と云う形でそれを噴出させなかったのは或いは美質と云えたかもしれない。仮に周りに聞こえる程度の声を出したならそれこそ由海が疑うだろう。自分は英一以外からは見捨てられ掛かっていたと。……風が微かに吹き込んでいた。木立の葉擦れがさめざめとした二人の雰囲気余計淋しいものになっていた。

「本当に見捨てようとしたなら、楚さんはここにいないんじゃないか？」

英一は反駁した。それは無理があるかもしれないと内心微かに思うところではあったが、それでもこの後輩が心にわだかまりを抱えたままにしているはそれこそ足を取られる理由になってしまうだろう。彼は敢えて少し強い調子で続けた。

「俺がああ《捕食者》の囿になって、楚さんはどうにか追っ手から逃れたんだ。その後彼女を保護したのは二人だろう？」

「そ、それだって瀬之川先輩が助けに行くって言うたから……」

「俺がいなくなった後もあの周囲に何がいたかなんて分からなかっただろう。それでも助ける為に動いたんだ、俺は正にそうして欲しくて飛び出したんだから、名賀搦さんはちゃんと期待に応えてくれたんだよ」

小春の両の肩をがしりと手で掴んで英一は言った。……小春は少しだけぼうっとした表情で英一を見上げた。英一はそれに微笑んで、肩を放した。奏美がそこで追って来た。大きな声を出した英一を気に掛けて出て来たのだ。英一はそれを心配ないと軽く応じ、小春を促しながら中へ戻ろうとした。小春は奏美が先に戻ったのを見て、思い付いた様に慌てて英一の手を掴んだ。驚いた英一が振り返ると、もじもじとした小春がやはり小さな声でこう言った。

「あの、先輩。もし……もし、よければ、これからは、苗字じゃなくて、小春って、呼んでもらえますんか？」

英一はすこしばかんとしてこれを聞いていた。意味が頭に入って来ると些か混乱した表情をして、ああ、とかええと、とかしどろもどろになりながらこう応じた。

「その……呼び捨ては流石にどうかと思うから、小春ちゃん、で、どうかな」

小春の表情が桜の開花の様に華やいだ。こくりと一つ頷く。英一は照れながらもやはり中に戻る様促し、小屋に入って行った。これを見た由海はあまりよく分からなさそうな顔をしていたが奏美は英一に続いた小春の表情を見て英一に視線を投げ掛け、嬉しそうな笑顔をこぼした。それから英一が小春のことを下の名で呼ぶのを見て由海もどこか得心がいった様子になる。そこには一瞬だけ焦りめいた動揺が紛れていたのだがそれを目敏く認識した者はいなかった。一方で英一は針の筵に座らされているのとはこれは大差ないのではとも思われる気恥ずかしさだったが、仮にもそう呼ぶとした以上これを曲げてはいけないと信じた。

兼輔は教授の戻りが明らかに遅いが故にやや危険ながらと自ら探しに出たので当面戻って来ない予定だった。四人は書置きを残して出発し古城内部へ向かうことにした。奏美は英一が《捕食者》に飛び出す前に置いて行った鋸を持って帰っていたので、重い金属の鋸を英一が、游次郎から受け取った角材は奏美が持つておくものとした。角材を奏美と由海のどちらが持つかは少し意見が分かれたが、ジャンケンをしたところ由海が負けた結果である。自虐的に自分弱いなあと彼女はこぼしたが英一や小春は苦笑するしかなかった。

西の城門は静かだった。暗く禍々しい空模様がどこか不釣り合いにも思える程に。四人は辺りを警戒しつつ跳ね橋を渡ったが、周囲には何も出て来なかった。そうして彼らが城内で目にしたのは城塞都市の廃墟の光景だった。どれ程の年数が経った後なのか彼らには判じかねたが、数十年は優に経っているような古びた、死の街と化した瓦礫の山々だった。あちこちに人骨と思しきものが散乱していて奏美や小春は気分の悪そうな表情をせずにはおかれなかった。二人を英一や由海が労わりながらここからどうするかを彼らは相談した。

「とりあえず……何か使えそうなものや、東側に出る為の経路の探索だよな」

「うん。やっぱり気乗りはしないけど、贅沢は言ってられないから」

「だとしたら手分けした方がいいでしょうか」

「そうかもしれないな。ただ辺りが本当に安全とは限らないから、俺と奏美は分けて動く方がいいと思う」

「やっぱり武器のあるなしは違いますよね」

「どれだけ身を守るかはともかく、リーチがある分も何かしら役に立つだろう」

それで組み分けのジャンケンをしたところ英一は由海と、奏美は小春と組む格好となった。思えば干上がった川と牧場の時同様の組み合わせになったなと英一は思い、傍らの由海を見てすこしどきりとした。しどろもどろのやり取りの中で自ら下着を晒しに掛かって来た彼女と再び組むことになって

些か英一は緊張を抱いたものだったが、盗み見た由海の態度は大人しくどこか思案している様な趣があった。それぞれの組はそうしてスマートフォンで二時間後にこの西門前に集合と決め、南東と北東へ散った。去り際、手を振る奏美と祈る様に胸元で手を組んで瞳を潤ませる小春の姿が目付いた。

英一は由海と共に南東へ進んだ。辺りにはまだ形を保っている建物も幾つかあったが、その扉は大体壊れていて崩れた部分から中を窺っても廃屋と云う言葉しか出て来なかった。迂闊に踏み込んでその拍子に倒壊する危険を思うとその中に入ることは躊躇われるものだったが、何の成果も上がりませんでしたとなつては流石に考え物であることから二人の見立てである程度頑丈そうな、綺麗な建物を選んでどうにか中を調べることにした。

「あの、葦杜君」

廃屋の一つで由海が英一の背中にそう呼び掛ける。彼は、まさかと思いつつも振り返った。由海はどこか申し訳なさそうな顔をして立っていた。

「前に、干上がった川の辺りでやったことについて、謝らせて欲しいの」

「え？」

「その……あの時は驚かせてごめんなさい。あんなことをしている場合じゃなかったのに」

「いや……確かに、どう云うつもりだったのかよく分からなかったけど……」

「どうか、その、笑わないで聞いてね」

由海が語ったところはシンプルだった。前々からひっそり英一に片想いをしていたと云う吐露。しかし平素から奏美や月子が一緒に学園のクラスも別の由海には堂々近付く機会が美術部しかなくその美術部内でも英一だけに話をするチャンスがさっぱり巡って来ないが故に、今回勇気を出して同行を申し出、都合良く奏美や小春と別行動に至ったが為に私欲的な告白を敢行しようとしたがいざ当人を前にして伝えるべき文言が頭の中から真っ白になってしまつて、場当たり的に色仕掛けをしてそのまま既成事実化を試みようとしたと云うのがその内実らしい。……何とも、年頃の男子にとってはどう受け止めるべきか迷う吐露である。幼馴染の女の子を二人といつも連れ歩く英一はしかし異性と交際していたと云う前歴はなく当然童貞であるので、そんな色仕掛けを相手取って余裕をかました態度など元より取れよう筈もない。一通りを伝えられても、やはり応じる術など彼にはない様なものだった。

「いや、まあ、びっくりはしたけど、その為に何か不味いことが起こった訳じゃないから……。えっと、楚さんは、本当に俺のことが、好き、なの？」

「うん。今までも、頑張り屋さんだと思つて素敵だと思つていたけど、昨日はあの化け物から私を助けてくれて、感謝しかないし、余計、好きつて気持ちちはつきりしたから……」

「ああ、それは……ありがとう。でも、俺は……楚さんのその気持ちに、応えるとかどうとか、考えたことがなくなつて」

「うん……そうだと思う。そもそも先に、ここから何とか脱出する方が先だしね」

「あ、ああ」

「葦杜君、その、このことは、無事に帰れたらでいいから。今は私があなただけのことをどう思っているかだけ、知つてくれれば私はもう、十分だから」

この言を真正面から鵜呑みにするのはそれこそ乙女心が分かっていないと取られるべきであろうか？　ともかくも英一はこの様に言われて少したけ安堵した。差し当たりどの様な答えを返すのか、猶予されたことでその件は一旦横に置いておける訳だから。……仮に由海がここで洋画の主人公に似るような男気を、それとなく抱きしめてその唇を優しくキスで覆つてやる様なロマンスを期待していたとしても少なくともそうしない逃げ道を与えたのもまた当人である。そこまで考えているのかどうか由海の態度と表情からは窺わせなかったものだが、思考を切り替えるには十分だった。英一は心の中で、口外しないと自分に言い聞かせた。

廃屋の中には凡そ使えそうなものが転がっていなかったが、そんな中由海がこの廃墟の姿に対して一つ考察を示した。

「私が知ってる範囲ではこの建物やこの古城、この市街地の様式はどうも記憶に当てはまる感じがしないのよ。西洋風の城塞都市には見えるけれど、それは遠目に見た城壁だけの話でこの建物なんかは色褪せてはいるものの土壁の塗料は黄色だったり赤だったり、どこかカラフルなのよね。勿論欧州のどこかにこうした街並みがあるかもしれないけど、散らばっている小物も西欧風だとか東欧風だとかそう云う括りより、何でしようね、もしかして中南米的？　とにかく、何か西洋風の城下町と呼ぶには何か違う気がするのよ」

「……詳しいね。楚さんは普段から真面目な部員と云う感じだったけど、美術史とかにも詳しいんだ」

「十慧先輩程じゃないけどね。私、うちの学園の美術部は好きだから」

それは見ていれば分かる、と英一は思った。同学年の部員の中では一際熱を入れて部活に取り組み、デッサンや写生をさせる分には顧問の教師からの評価も高く半ば二足草鞋で中途半端のきらいがある英一や兼部などをしていない奏美よりも上手い絵を描くのである。こんな風な人だからこそ先程の吐露にはたまた意外さと少年的な困惑を思い抱かせたものだったが、その様な要素さえ認識から追い払ってしまえば由海はごく善良な同学年のままだった。

この廃屋から見つけ出せたのは結局一本の赤錆びた包丁だけだった。これをして身を護る武器として使うにはとても心強いとは云えないが、差し当たり得物の一つも持たない由海には気休めにぐらいはなるだろう。二人は廃屋を出て次にめぼしそうな建物を探す。――ふと、英一の視界に何かがよぎった。それは少女の足の様に思われた。英一は微かに呼吸を止めたが、直ぐに吸い寄せられるようにそれを追って歩き出した。余りにそれが自然にそうしたものだからか、由海は英一が自分から離れて行くことに気付けなかった。英一が追ったその足が曲がり角に消え、それを追えば今度は廃屋の影に消える。徐々に駆け出した彼は気が付くと城壁際にある詰所らしき場所に誘導されていた。その詰所の前に、少女は彼に背を向けて立っていた。その後ろ姿は彼にとり忘れよう筈もない妹のそれにならなかった。

「翼……」

振り返った少女は応えなかった。微かに口元の開いた無表情で英一を見るそのあどけない姿見は僅かに光を放っているかに見え、また透けて見えた。それはどう考えても尋常の人間なら有り得ないことで、それを認識すると英一は不意にこれまでの経験を思い出しこの相手が化け物の仲間ではないかと訝らせた。彼の知る者を思わせる姿をして出て来た敵もいたものだ。それは当然のところであろう。「お前は、翼なのか。それともこの辺の化け物共の仲間なのか。どっちなんだ」

やはりその問いに少女は応えなかった。彼女は少しだけ悲しそうな顔をして、その詰所を指さすと彼が瞬きした次の瞬間には掻き消えてしまっていた。英一はその謎めいた邂逅に緊張を解けず、高鳴る心臓を感じながらもゆっくりと扉の崩れている詰所へ歩みを進めた。中は暗かったが、石造りの構造は差し当たり目立った傷を伴っておらず易々と崩れる様には思われない。彼はライトで中を照らした。照らされた中にはかなりの年月が経った人骨が幾つも転がっていたが、目を落とした先に光るものがあった。彼はやはり慎重に近付き、それを拾い上げる。一本の鍵だった。錆が付いてはいるが少なくともまだ使えそうに見える。どこに使うのかは分からないが、持って行く価値は恐らくあるだろうと考え英一はそれを懷に仕舞った。幸いにして何も厄介なものとは現れなかったので彼は外に出て漸く少し気を楽にした。

「……あ。楚さん、どこだろう」

遅まきに彼は相方を置いて来てしまったことに気付いた。何たる失態だろう。そもそもどう云う経路でこの詰所まで来たのか彼はあまり覚えていなかった。この上スマートフォンを見ると予定の二時間までそう時間が残されていなかった。とりあえず西門は見えるからそれを目指して戻るか。英一は気持ち急いで動き出した。

西門には奏美と小春が先に待っていた。二人は英一の姿を見て喜んだが、由海が続いていないことに気付くと不安げな表情を見せた。

「ごめん、うっかりはぐれてしまつて。ここに戻って来ていないってことは、まだこの街のどこかにいるってことかな」

「多分そうだと思う。わたしたちが調べた範囲では反対側や南へ向かう道はどこも塞がつてあまり遠くには行けないみたい」

「あそこに見える城郭への道も塞がつていました。ここ、殆ど袋小路ですね」

「その上で予定の時間になつても戻っていないってことは……」

三人は顔を見合わせた。明らかに小春が不安を強めている。急いで探さねば何が起るかも知れないだろう。三人はまとまつて再び廃市街に入った。危険を承知で呼び掛けるべきかと思われた矢先、視界の先の曲がり角より由海が現れた。由海は心細そうに包丁を握り締めたまま視界を左右に振っていたが、三人を見つけると急いで駆け寄つて来た。

「ごめん、楚さん！俺がうっかり勝手に動いたから……」

「それはいいわ葦杜君、近くに、近くにあの黒い男がいる！」

「！」

四人に緊張が走つた。――俄かに辺りに闇が立ち込め始める。まだ日没には早い筈でありながらその異様な雰囲気は四人は危機を悟つた。不意に英一は物音を聞き、手前の廃墟の上方を見た。闇が不気味な音を立てて寄り集まり、《黒い人型》を成した。それはずっと自分たちを見下ろして来たのを四人は見、彼らは一目散に走り出した。奏美が悲鳴を上げて先頭を走り、由海が続いて小春の手を引き、最後尾は努めて英一が走つた。《黒い人型》は銜いもなく廃墟から飛び降りて悠然たる調子で歩き出し、徐々に走り始める。捕まったらおしまいだ。四人の意識は助かりたい一心に染まつて苦しむ息と闘いながら駆けた。

「あ、あれ！」

奏美が左手の家屋を指した。まだ幾らか形を保つた建物がある。英一は素早く後ろを振り向く。

《黒い人型》は丁度その視界から外れ、足音だけの存在となつていた。四人は視線だけで合意を作り、その廃屋の扉を開いて駆け込んだ。

「あっ！！」

慌てた由海が姿勢を崩して倒れ込む。余裕のない小春がそれに足を取られて続いて倒れてしまう。英一は渾身の力で小春を助け起こし、素早く更に由海の腕を掴んだ。由海は呻き声を上げている。足を挫いたのかもしれないと思われたが今はそれを考えている暇すら惜しく、小春を直ちに廃屋に入つた奏美に引き渡し、由海を背中で担いで英一は廃屋へ飛び込んだ。奏美は彼ら二人が入つたのを見ると即座に扉を閉じてこれを背に立つ。その視線は古びた扉に出来ている隙間から垣間見える外の景色に向いていた。

闇の立ち込める廃墟の街並みの中を不吉な足音が駆けて近付き、近くで停まる。小春は壁を背に床に座り込んでただ震え、声を上げない様に自制しているので精一杯の様子だった。由海は痛む足に顔を歪めながらもやはり気配を消そうと必死、英一は三人の間に屈んで全てが何事もなく過ぎるのを心中で強く祈りながら戸口を凝視していた。足音は周囲を巡回する様に動き、やがては彼らの立て籠もる廃屋の前で停まった。暫く不気味な沈黙が続いた。そしてその後、あまりにもわざとらしい戸口を叩くノックの音が響いた。それに奏美が微かに怯えの声を漏らしてしまう。直後、一拍措いて彼女の

隣に拳が飛び込んだ。《黒い人型》の鉄拳が扉を貫いたのだ。いよいよ廃屋には悲鳴が満ちた。もうおしまいだと誰もが思った。……しかし腕を引き抜いた《黒い人型》はそれから何もせず、不意に明後日の方向へと走って行くのが聞こえた。その気配が遠ざかると共に徐々に辺りを覆う闇の程が薄れて行く。どう云う理屈なのか誰にも分からなかったが、それでも少しずつ彼らは危機が去ったらしいことを認識して脱力した。ただ、それから最初に復帰した英一が外の様子を窺おうと俄かに風穴から様子を垣間見た時、遠くから見知らぬ悲鳴がこだましたのが聞こえた。それ故に四人は、ここに長居してはいけないと考えずにはおかれなかった。

「捻挫しちゃったのかな。ちよっと、立てない」

由海は廃屋に残っていた寝台に寝かせられた。靴と靴下を脱がせて三人は患部を観察したが、それ以上出来ることもなかった。可能なら一刻も早くこの場から立ち去る必要があるにも関わらずこうなっては、と焦りが彼らを支配する中、由海は続けて言う。

「三人とも、先に行つて。全員が全員ここにいたらあいつに皆殺しにされてしまうわ」

「そんな、楚さんを置いて行けないよ！ そんなこと……」

「俺が悪かったんだ……独りで勝手に動いたから」

「……後悔、後先立たずです、葦杜先輩。自分を責めないで下さい」

「ええと、葦杜君、とりあえずみんなをこの場から離すとして、行く先は考えられる？」

問われて英一は返答に困ったが、ふとあの謎めいた導きに従って手に入れた鍵を思い出した。取り出された鍵を三人は見る。

「どこで使う鍵なのかな……？」

「えーと、ぱつと見ではこれは詰所みたいところにあったから、ひよつとしたらその辺りにどこか合う鍵穴があるかもしれない」

「既にこの辺りから離れられる道はなさそうだって確かめましたから、あるとしたら城壁に登る昇降口でしょうか」

「それなら、その詰所みたいなところの方角だけ教えて。立てる様になったら何とか追うから」

嫌な判断を強いられると英一のみならず奏美と小春も思わされた。少なくとも見知った顔を置き去りにすることを三人は到底認めたくはなかった。それでも彼らの胸中にはあの《黒い人型》に自分たちが縊り殺されることへの恐怖が色濃く染み付いていて、由海が自らを置いて行く様に言うその判断が合理的であることを認めざるを得なかった。ただ感情ばかりがこれを是認しかねていたのである。

……夜が近づく現状、長く悩んでいる場合ではなかった。英一は強い自責の念故に奏美と小春を動き出す様促した。尚も二人は渋ったものの、由海はその判断を認めなかったので遂に二人もまた折れた。「じゃあ、せめてここで……お腹満たしていこ」

奏美はそう言って、最後に残っていた缶詰を取り出した。小春が持っていた分は昨日由海が合流した際に彼女に分け与えていたことでもう残っていないかった。同じくして拾ったピクルスは英一が戻ってくるまでの間に食事として食べ尽くされている。しかしその後英一が戻ってくるまで三人は兼輔と共に周囲を探索して少しだけだが食べられるものを見つけていたので、四人はどうにか食事と呼べる程度のものにありつけた。一つの缶詰を小さくフォークで切り分けて四人で食べ、食べられそうなベリーと思しき果物を鞆に詰めていた小春が配った。試食はしてあるので毒に中る心配はないらしい。これと由海が茂みに置き捨てられていたリュックから手に入れたポテトチップスの缶。未だ酒瓶は開けていなかったが、重いことから漁師の休憩小屋に使った水代替わりとして置いて行っていた。

「あ、俺、正雁先輩からガム貰ってたんだ」

四枚のガムを見せた英一に、少し考えた顔をした奏美がこう答えた。

「英一くん、それは……最後の手と思って取っておこうよ」

「そ、そうか？ 確かに腹を膨らせるには役に立たないけど……」

「四枚あるから、みんな一枚ずつくれる？ 四人また集まったら、みんなで食べようよ」

その優しい提案に由海、次いで小春が微笑んで賛意を示した。こうなつては悪役になったところで益体もない。英一は頷いて一枚ずつ彼女らに渡していった。その後、英一は自分の持っていたペットボトルを見る。入っていた茶は休憩小屋を出る前に飲み干してそこで真水を詰め替えていた。まだ三分の二は残っている。この水が尽きたらいいよ最期だろうと思わされた。

後ろ髪を引かれる思いで三人は由海を置いて廃屋を出、ゆっくりとその扉を閉めた。見送る彼女の笑みは心細さを纏つての虚勢であらう。やはり三人は気が重かったが、それでも行くと決めた以上は進まねばならない。英一は先頭に立つて二人を先導した。《黒い人型》に追われる前は道に迷う有様だったので土地勘は未だになかったが、どうにか夜に辺りが包まれる直前頃には三人は詰所まで辿り着いた。幸運にも逃げる際に奏美が手放して捨て置かれた角材も拾うことが出来た。ライトを点けて周囲を眺め渡すと、詰所の傍らに古びた扉が見える。それには錠前が掛かっていた。英一は二人と目を合わせ、懐の鍵を取り出して差し込む。ガチャリと音がして錠前が開き、落ちた。鍵は錆びていたせいか半ばから折れてしまいもう使えなかった。三人は暗い螺旋階段を恐る恐るに登り、城壁上部の歩道へ出た。地上五階程はあろう高さだが辺りは空の禍々しささえ霞む夜の闇に覆われており殆ど何も見えなかった。この様な中でライトを付けたまま城壁を伝うのは自分たちの居場所をあの化け物たちに伝えている様なものではないかとも思われたが、うっかり落ちたら余計助からないことも明らかであった。英一たちはやや慎重に歩道の壁面を手で確かめながら城壁を東に向かって伝つて行った。――不意に奏美が声を上げて彼方を指さす。東側より小さな光が少しずつ近付いている。三人はまさか、と思った。

「英一！」

月子が紹と常人を連れて正門上の円形広場の入り口に達し、手を振った。それは全く奇跡的なこととも言えると思われた。彼らが尚も生き延びてここまで達することをどれだけ信じられただろう。恐らく游次郎は上手くやったのだ。その割には彼の姿は月子の一団には見えなかったものだが……。

「月子、瑚潑、それに那於巴！ よく無事だったな！」

一同は合流を果たす、と思つたところで大きな振動が走った。動揺の音が両側から走る。揺らぎに よるめきつつも英一と月子は正門の下を見た。そこにはこの暗闇の中からさえはつきりと分かる

《捕食者》の姿があり、それは正門を力任せに体当たりしていたのである。繰り返される衝撃に城壁の岩面が罅割れる不吉な音がした。英一はその罅割れが相互の間に達したのを見て叫んだ。

「下がれ、落ちるぞ！」

言つた直後、轟音を立てて城壁が崩れ始めた。慌てて両者は西側と東側へ退いた。崩れ落ちた城壁と城門は《捕食者》を呑み込んだが彼らにはそれを見ている余裕はなかった。仮に見ていてもどこか、あの化け物ならその程度で死にはすまいと云う予感を抱かせた。……二組は東西に分断されたまま、夜の空の下で互いを見た。折角の再開を喜びたかったものだがこれではそれも行かない。今少し早く到着出来ていればと英一は悔しがったがこれは月子も同様らしかった。だがいつまでも後悔していても始まらず、月子の方から呼び掛けて現状確認が行われた。月子はやはり游次郎の接触を受け、また湖側で活動していた嘉尾教授の助けもありどうにか城壁内部へ侵入しこちらまで登つて来れたと云う。一方で二人は東側で遭遇した《哄笑する女》に追い回される内にはぐれてしまったと云うことだった。

「ところで、千ヶ嶽さんはどうしたんだ？」

英一が何気もなく尋ねたところ、離れたところにいる三人の様子が些か変わった。明らかに紹と常人が不愉快そうな態度を浮かべて顔を逸らしている。月子は晦渋な表情をして言つた。

「ごめんなさい、喧嘩になつて彼女の方から抜けてしまったわ。どこにいるのかは私たちにも分からない」

「そうか……」

百香は実際美術部員の中では評判が良いとは云えず、特に初佳とは度々対立してこれを顧問に宥められていたものだからどこかさもありませんと思わざるを得ない部分があった。しかし月子と云う女はそう云う百香相手にも決して阿ったり或いは毛嫌いしたりしない、話せる相手であり続けていた様に英一には記憶されていた。その彼女をして引き留められなかったと云うのは何より当人にとって痛恨沙汰であつたろうことは容易に想像出来、英一も痛ましい表情を浮かべざるを得なかった。これに比べて切り離された由海とは再会を約していると思うと自分たちは恵まれているとも。

「ねえ、英一、それで、そっちに余裕はある？　もし差し支えなければ、食べ物なり使えそうな道具なり、分けて貰えない？」

月子がそう頼んで来た時、奏美と小春は顔を見合わせた。あるのは鋸と角材、それに三枚のガムだけである。マツチは由海の元に戻っていたので三人は持つていない。割れた城壁の間から渡すとしたら投げて渡すしかあるまいが、届けられるとしたら英一しかいない。だがこれらは渡せるのかと云うと、二人のみならず英一にも怪しく思われた。英一抜きで状況に陥った時身を護る術が奏美と小春には無いも同然だった。その英一も徒手空拳では限度がある。この上食べ物はあるが無きが如し、大体ガムほど軽いものをこの夜闇の中で綺麗に対岸に投げ渡すのは至難の業であろう。

「すまん月子、余っているほどのものは無いんだ。この場合は勘弁してくれ」

実にその時英一や奏美たちから遠い彼らの中で月子はやはりそうだろうと云う苦渋の表情を浮かべたのが見えたのだが、その傍らで男二人が明らかに失望と云うか絶望的な色の瞳をしたことまでは見えなかった。だが少なくともその片割れはそのまま黙っていられる気にはなれなかったらしかった。

「なあ葦杜、本当かよ。お前そのでかい鋸持つてるんじゃないか。瀬之川さんが持つてるその角材さあ、彼女には大きすぎるんじゃないかねえのかよ。くれよ」

紹がそう懇願する様に求めた。月子はそんな先輩に窘める様な顔を向けるが彼は取り合わない。……月子は片手にスプレー缶らしきものを握っているが紹と常人は何もその手に持つていなかった。

何も得られなかったか、さもなくば放棄せざるを得なかったか……。已むを得ざる事情を吟味してか、奏美が英一を見る。それを見る英一には自分の判断がいよいよ悪人めいて映り、徐々に絆される方へ感情が傾き始める。だがそこで小春が英一の腕を掴んで彼を見、その視線が自分に向いたのを確かめると向こう側の男子を見た。彼女は二人の雰囲気と異様さ、不気味さ、つまりはどこか信用ならぬものを感じていたのである。それで英一は自らの内に醸成されていた情を締め上げた。

「駄目だ。大体この距離にこの夜で投げて届く気がしない」

「お前なら出来んだろ！？」

「あんまり過信しないでくれ、俺はそんな器用でも何でもない」

この回答は紹をがっくりと俯かせた。常人が一度彼を見、英一を見やる。その視線の意味を彼は辺りの暗さ故に測りかねた。周囲の嫌な雰囲気は月子がどこか焦りを覚えたらしく、二人に一旦先に戻っている様言った。二人は力ない足取りで城壁を引き返して行く。幾らかその後ろ姿が遠のいたところで月子は英一に向き直った。

「ごめんね英一、それに奏美と名賀搗さんも。楚さんを置いて先に行かなければならない程度には余裕が無いのは瑚潑君と那於巴君だって分からないとは思わないから、二人を責めないでやって」

「分かっているよ。だけど本当に、すまない。ここまで来て何もしてやれなくてさ」

「あの《捕食者》とか云う化け物さえいなければ少なくとも合流出来たんだから、誰のせいでもないわよ。差し当たり、あんたと二人が健在なことが分かっただけでも少しは安心出来るわ。今も生き残っているのがどれだけのいるのか、こんな具合じゃさっぱり分かりはしないものね」

「そうだな……」



あの城まで忍び込んで不思議な機械を見つけたそうよ」

「不思議な機械？」

「信じ難いと思うけど、彼が読み解いたところによるとそれは時空間を転移する乗り物らしくて、上手く復旧出来ればここから脱出出来るかもしれないって」

「えっ？ ……ちょっと俄かには信じ難いな」

「私もよ。二人もそうでしょう？」

「え、ああ、うん、よく分からないけど……でも、ここから脱出出来るかもしれないって云うんなら探してみるのもいいかもしれないね」

「そうですね……このままあてもなくあの化け物たちから逃げるだけしか出来ないままじゃ、助かりっこないですから」

「お互いベストを尽くしましょうね。それじゃ、必ずまた会いましょう」

月子はそう述べて先に去った二人の後を追った。夜闇の内に遠ざかって行く彼女の背姿を英一は見ながらただ不吉さ、訳もない不安を思い抱かずにはおかれなかった。自分は彼らを、月子を助けなかった。その代償をいずれ支払わされるのではないかと云う殆ど虚妄の様な考えを。……英一と紹は同じ美術部員で尚且つ同級生ではあるが、普段からつるむ相手と云う程の仲ではなかった。英一の場合平素なら月子と奏美がいる分他の男子には若干近寄りにくい部分があり、一方で紹はサッカー部と兼部していることもあって典型的に男子の友達と絡んでいる少年だった。とは云え、美術部で活動を共にする中でそれなりに話をし、全く打ち解けていない間柄ではないと英一は信じていたものだった。時折彼の女友達二人のことを以て英一を弄る程度には話せる間柄だと。その紹は後輩の累の世話を焼いたりで凡そ嫌われる人物像でもない、本来なら快活で余裕のある男であろう筈なものだが、この窮地とは彼の様な少年をかくも焦燥させるものかと、この友達に改めて詫びたい気持ちにもなるものだった。これに比して常人は女子受けは良い明るくやや軟派な雰囲気醸す少年なのだが、この日見た彼にはそうした普段の面影はすっかり奪い去られている様にも思われた。ここへ至る過程を全て知ればその理由も分かるのかもしれないが、不毛な望みでもあった。重い雰囲気のままに三人は城壁を引き返し、その視界の先に月子の言った通り楼閣が聳えているのを暗夜の内にも仰ぎ見た。不気味な夜を分かつような楼閣。三人に夜風が吹き付け、そのどこか冷ややかな空気、静寂な辺りを掻き乱した。